肥育経営から繁殖･肥育の一貫経営へ
～経営安定のため大転換に挑戦！～

豊田市　志賀牧場（志賀俊治さん）
畜産（肉牛）

【平成 29 年９月 28 日掲載】

豊田市の山間部で黒毛和牛の繁殖から肥育まで一貫した経営を行っている､志賀牧場の志賀俊治さんをご紹介します。

移住して経営開始

志賀俊治さん

志賀さんは昭和 28 年に、岡崎市でホルスタイン種の肥育を営む農家に生まれました。高校卒業後、家業を継ぐ決意をしたものの､両親は岡崎市の牛舎を撤去して廃業する予定だったため、別の土地を探しました。昭和 50 年に現在の場所（豊田市和合町）に単身で移住し、牛舎を新設して両親が育てていたホルスタイン種を譲り受けて経営を開始しました｡周囲に養豚農家や酪農家はいたものの、肉牛農家は志賀さん一戸のみで、相談できる仲間はいませんでした。昭和 54 年に妻の厚子さんと結婚し、夫婦で試行錯誤しながら生産に取り組みました。

ホルスタイン種の肥育経営の危うさを実感

豊田市和合町は標高約 600m の山間部にあり、夏は涼しく牛の飼育に適した環境です。昭和 60 年頃、当時としては大規模となるホルスタイン種 120 頭に拡大し、肥育専業経営を行いました。経営の安定のため、年間通して出荷できるよう計画的に子牛を導入したり、飼料を自給生産及び配合して経費を削減するなど様々な取組を実施しました。

しかし、経営に一番大きな影響を与える子牛の導入は、価格変動が激しく、供給元である酪農家や繁殖農家の減少による子牛の不足など、自分で制御できない要素が多くあり悩みました。さらに、せっかく子牛を導入しても、飼育環境の変化により疾病などにかかりやすく、肥育専業経営のリスクを日々実感していました。

黒毛和牛の繁殖・肥育の一貫経営へ転換

志賀さんは、経営の初期の段階から、肥育だけでなく繁殖もやってみたいと考えており、平成元年頃から、リスクの軽減のためホルスタイン種の牛舎の一部に黒毛和牛を導入し、７，８頭の規模で繁殖・肥育を試しました。

繁殖･肥育の一貫経営は､子牛の価格に影響されず､飼育環境の変動による疾病などが減少し、肥育管理へ円滑に移行できるなど大きなメリットがありますが､一般的に肥育専業経営からの転

換は非常に難しいと言われています。特に、繁殖から出荷までに４年かかるという資金面と、繁殖用の母牛のデリケートな飼養管理ができないといった技術面の２つに大きなハードルがあるため、志賀さんも試行はしていたものの経営の転換にはなかなか踏み切れませんでした。

平成 18 年に新設した牛舎

しかし、平成 13 年に起きた BSE 問題の際、牛肉や子牛の価格が暴落した中、黒毛和牛の価格だけはあまり低下しなかったこと、ちょうどその頃、息子の晋（すすむ）さんが就農する意向を示していたことから、需要の多い黒毛和牛を用いた繁殖・肥育の一貫経営への転換を現実的に考えるようになりました。

そして平成 18 年、晋さんの就農を機に 1,000m^2 の牛舎を新設し、豊田加茂地域では初めて、繁殖・肥育の一貫経営を本格的に開始しました。

繁殖・肥育が軌道に乗るまで

肥育専業経営から繁殖・肥育の一貫経営への転換は、資金面でも技術面でも想定通り厳しいものでしたが、志賀牧場では、これまでの貯蓄や経験を駆使して乗り越えました。特に技術面では、20 年近く繁殖を続けてきた中で、濃厚飼料を与えすぎて難産になったり授精しなかったりといった失敗をすでに経験していたため、これらを活かしながら、受胎率を上げられるよう努力しました。また、息子の晋さんに肥育技術を伝えて、親子で役割分担して取り組み、安定した肥育ができるようになりました。

平成 27 年頃からは経営が軌道に乗り始め、平成 28 年には、枝肉の上物率（Ａ４ランク以上の割合）90 %、販売額も過去最高となりました。この年、晋さんに経営権を譲ることになりました。

息子を支えて次の段階へ

大きく育った牧草。夏の間は、その日必要な量を毎朝収穫して生で給与する。

現在、志賀さんは、出産間近の牛の管理と分娩のほか、自給飼料の生産を担当しています。ここ数年、輸入飼料の価格が急激に上昇したことを受け、以前から行っていた自給飼料の生産をさらに拡大しました。平成 28 年には、作付面積５ha、繁殖用の母牛に給与する粗飼料の８～９割をまかない、志賀牧場の経営を支えています。

志賀さんはこれまで、牛肉の輸入自由化、BSE や口蹄疫など、何度も外部要因から影響を受けてきたため、少しでも経営が安定するように情勢に合わせて変わってきました。今後の経営についても、「受胎率をさらに上げるためには良いタイミングで種付けをする必要があるが、現在の労働力の中では改善が難しい。息子は、規模拡大を見据えて従業員を雇うかどうかなど、これからまた様々なことを勉強していくことになると思う。」と、厳しい道であることを想定しながら、志賀牧場のさらなる発展に期待をしている様子が見られました。

執　　筆：農業経営課
取材協力：豊田加茂農林水産事務所農業改良普及課

Copyright (C) 2017, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.